



実力テスト

▼10月3日(木) ●●

- 1 防災訓練 20分かかって立派とは
- 2 始業式
- 3 数学実テ 出来なかった by ●●
- 4 理科実テ 初めての教科選択だった by ●●

後期が始まりました。果樹園をつくりたいです。理科の時に生物途中でやめて地学やったのが痛かった

☆るんぱっぱ → バリにいる和田尚弥

▼10月4日(金) ●●

- 1 国語 途中から意識が――。
- 2 英語 やっほっほー
- 3 社会 zzz…。

久しぶりの部活だあああああ！やっほっほおい！もうディズニー疲れがとれません…2日おきぐらいにいとっていると、さすがに体がもちませんね☆ 土日はゆっくり休みます。

☆和田尚弥 →

*

●●くんは「和田尚弥」のシリトリが金曜日には浮かばなかったようである。佐倉先生の講演を踏まえて？今日中に書いて●●くんに渡すこと！

ところで実力テスト、どうだっただろう？上の学級日誌の記事を見る限り悲惨な状況が予想されるが(笑)、まあ、楽しみにしておこう。

ちなみに、国語の一番の問題は私が出題した問題。問題文をさっとみて、「おっ！短いじゃん！ラッキー!!!」と思った人は、読み始

めてそれがまったくアンラッキーだったことに気づいただろう。古文・漢文もそうだが、概して文章が長い方が「ラッキー！」と思えるものである。短いということは、それだけ内容がつまっていて、ワケが分からんということになりがちなのである。

あの文章はH・R・ヤウスという人の『挑発としての文学史』(轡田収訳、岩波書店、昭51)という本からとったもの。かなり昔の本だが、この本の中で展開される理論は現在でも文学批評の根本をなすものの一つとなっている。出題部分を簡単に要約すれば、文学の歴史性は、事後的に作り出された文学的事実の連関に基づくのではなく、読者による文学作品の移行的な経験に基づく、ということである。つまり、文学的生起は政治的生起とは異なり、それ自体で存立し続ける不可避な継起ではなく、同時代や後代の読者、批評家、および作家がもつ文学的経験の「期待の地平」(＝作品を批評する尺度)によって常に価値を測定され続ける、ということ述べている。(←ワケが分からん人は再読せよ！)

ヤウスの主張のこの部分での中心概念は、いうまでもなく(だから問六に出題した)「期待の地平」というものだ。この言葉は現代の評論文にも出てくるから、その意味も含めて理解しておくことは有効である。(問六の解答は「これから読む作品を判定する新たな尺度」である。)

古文・漢文もよい問題である。実力テスト(模試)は復習することに意味がある。数学だけでなく、国語もしっかり復習を！